

審査の結果の要旨

氏名 小林信也

本論文『近世都市社会の構造と展開』は、近世後期の江戸から近代初頭の東京を素材として、巨大城下町、および首都における都市社会と空間構造の歴史的特質、及びその変容過程について検討しようとしたものである。内容は、序論に続けて、二部・七章・補論一つから構成されている。

第一部「近世後期江戸町方における空間管理と都市行政」では、まず1・2章で、河岸地や道路などの都市空間を取り上げ、その利用や管理をめぐる近世的なシステムと、幕府（町奉行所）支配の具体的様相を検討する。この内1章では、本材木町二～三丁目の新肴場河岸地をめぐる土地の用益・権利と管理・秩序が、また2章では道の持場管理や水路の浚渫システムがそれぞれ解明され、併せて近代への展開が見通される。次の3章では、天保改革期に惣名主の頂点の地位に抜擢された熊井理左衛門等三名の名主に注目し、当該期における都市行政の特質を論じている。

第二部「露店営業地と民衆世界」では、床店（とこみせ）と呼ばれた非常設で零細な露店の簡易店舗に着目し、都市民衆の生業としての社会＝空間の様相を多面的に明らかにしようとする。1章では上野山下の床店場所、2章では新大橋橋詰広小路、3章と補論では柳原土手通りがそれぞれそれぞれ取り上げられ、床店という露店営業を中核とする利権の構造や、営業権の物権化、さらには床店の展開する空間である広場・広小路管理の性格、あるいは近代初頭における変容過程などが詳細に分析・検討されている。また4章では、明治十年代半ばから二十年代の「新開町」の事例として佐竹ヶ原を取り上げて、旧江戸の民衆世界がどの様に近代化を遂げてゆくのかを展望している。

本論文の成果とその意義は以下のようなものである。

①これまでほとんどその実態がわからなかった江戸の広場・河岸地などの都市空間の具体像を始めて本格的に解明し、併せてこれら諸空間における社会構造の分析を緻密に行った点。本論文によって、城下町都市における社会＝空間研究の空隙が埋められたことになりその意義は大きい。

②床店という、広場や境内、道路上における都市民衆の重要な存立基盤の一つを多様な素材から明らかにしたこと。近世・近代都市社会における民衆的要素を考える上で、本論文における床店研究は独創的で、示唆的な内容・論点を豊富に有しており、貴重な貢献となっている。

このように本論文は多くの成果を上げているが、研究史整理の点でやや不十分であり、また都市社会論として展開するにはまだ検討すべき幾つかの課題を残している。しかし、上記のような顕著な成果に鑑みて、本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に十分相当するものと判断した。